The grass is always greener on the other side.【ロックバイソン】

饂飩粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【タイバニ】隣の芝生は青い／Ｔｈｅ ｇｒａｓｓ ｉｓ ａｌｗａｙｓ ｇｒｅｅｎｅｒ ｏｎ ｔｈｅ ｏｔｈｅｒ ｓｉｄｅ．

【ロックバイソン】

【Ｎコード】
Ｎ４４０９Ｚ

【作者名】
饂飩粉

【あらすじ】
【注意】タイバニのＴＶシリーズを最後まで観ていることが前提です。
ワイルドタイガーとバーナビー・ブルックスＪｒ．がヒーローを引退し、復帰するまでの間に起こった出来事として書いております。
タイガーとバーナービーが引退しても、ＨＥＲＯ ＴＶは依然と

してシュテルンビルトの市民達から愛され続けている。
ヒーロー達は今日も明日も市民のために悪と戦い、平和を守り、互いに競い合っていた。
ただ一人、万年最下位に甘んじているロックバイソンを除いて……。
ある日、クロノスフーズのヒーロー事業部担当に「次はない」と宣告されたロックバイソン。果たしてヒーロー存続の危機に晒された彼はこの状況をどうやって切り抜けるのか？

結局本編ではスポットの当たった回がなく、そのおかげで大した活躍もしなかったロックバイソンが主役です。個人的に大好きなキャラなので、彼が主役の話を自分で作ってしまおうと考えました。
最後までどうか暖かい目で見守ってやってください。

プロローグ：HERO　TV

封鎖された高架橋一帯で、ファイヤーエンブレムのカスタムカーが銀行強盗集団の乗った逃走車のバンを追いかけている。ハンドルを片手に、ファイヤーエンブレムはもう片方の手から火の玉を発生させ、タイヤを狙って打ちつける。しかし向こうは四車線使って蛇行しているため、なかなか当たらない。

「んもう！　交通安全も守らないなんて！」

互いに制限速度を大幅に超えている。

そこにブルーローズの跨ったバイクが追いついてきた。決め台詞をカメラの前で披露していたため、随分と遅れを取っていたのだ。

シュテルンビルトの外周をなぞるように走っていた道は、街の中心へと向かう右曲がりのカーブに差し掛かった。ブルーローズはそれを確認すると急ブレーキをかけてバイクを止めた。バイクから降りると、右斜め前方――カーブした道路の内側に向かって勢いよく駆け、軽やかな跳躍で宙に舞った。真下に、シュテルンビルトの夜景が広がる。ブルーローズは落下が始まる前に右手を下から上へと振り上げた。瞬間、バイクのあった場所から細い氷の筋が伸びていく。ブルーローズはその細い氷の道に着地すると、右手の指先から氷を発生させ、道を作りながら滑っていく。カーブした道に弦を張ったようなショートカットを作り上げ、逃走車を追い越した。

ファイヤーエンブレムと挟み撃ちするような形になったのはいいが、ブルーローズが着地した地点には既にドラゴン・キッドと折紙サイクロンも待っていた。

「何よアンタ達、先回りしてたの？」

「これも作戦でござる！」

「トランスポーターだと追いつけないからって、言われたから」

言い合っている間に、逃走車がカーブの果てから顔を出した。ファイヤーエンブレムのカスタムカーもそのすぐ後ろに迫っている。

最初に動いたのは折紙サイクロンだ。背負った巨大な手裏剣を大きく振りかぶって投擲する。手裏剣は回転しながら斜めに弧を描き、逃走車の進行を遮る位置に突き刺さった。急停車するわけにもいかず、逃走車はギリギリまでハンドルを切ってそれをかわしたが、そのままスピンして道路の壁に衝突した。

操縦席側からのドアから慌てて二人の男が飛び出してくる。それぞれ片手に銃を持って左右に大きく振り回している。すぐにでも捕まえてやろうとヒーロー達が囲みにかかるが、後部座席から人質の女性を引き摺ったもう一人が出てきたのを見て動きを止めた。

「く、来んな！　こいつを撃つぞ！」

人質のこめかみに銃口を突きつけながら、その男は叫ぶ。

「車を持って来い！　早くしろ！」

犯人三人と人質の女性は小さく固まったまま動こうとしない。三人は壊れたバンを背に、死角を作るまいとしきりに視線と銃口を左右に動かしている。

しかし、その膠着も長くは続かなかった。

犯人達の、唯一の死角から、もう一人のヒーローが降ってくる。それに気づいた頃にはもう遅く、犯人達は局地的な突風に襲われた。

攻撃と同時に空から急降下してきたスカイハイは、人質の女性だけをその腕に抱きかかえて再び飛翔する。

その頃、ロックバイソンもまた宙を飛びながら絶叫していた。しかし、彼が着地したのは封鎖された道路内であっても、現場から一キロ以上離れたところだった。

「くそ！　やっぱりトレーラーで直接行った方が良かったじゃねえか！」

頭から道路に突っ込みながらも、すぐに体勢を立て直して現場へと走り出す。だが、彼が着いたときには人質は救出され、犯人も全員確保されていた。

ＨＥＲＯ　ＴＶのカメラは、最後に現れたロックバイソンを一秒

たりとも映すことなくヘリコプターと共に大空へと去っていった。

ヒーロー活動崖っぷち（前書き）

登場するキャラはヒーロー姿でない限り、カリーナ、ネイサン、イワンなど本名での描写になります。

今回はアントニオ（ロックバイソン）だけですが、今後あの牛角コスチュームを着ていない限り地の文ではアントニオと書きますので、混乱するかもしれませんがよろしくお願いします。

ヒーロー活動崖っぷち

「……次はないからね」

恐れていたことがとうとう現実味を帯び始め、アントニオ・ロペスはその巨体に似合わずぶるっと身を震わせた。険しい目つきでこちらを見つめているヒーロー事業部の担当は本気だった。

もはや笑って済ませられる事態ではないのだ。それはアントニオ自身重々承知していたし、いつも何か言われるのではないかと内心落ち着かなかった。

その緊張を言い訳にしたくはないが、実際のところ最近の成績は目に見えて芳しくない。それもまた、今に始まったことではないのだが。

ワイルドタイガーとバーナビーが引退した今、正規リーグのヒーローはアントニオ扮するロックバイソンを含めて六人になった。スカイハイはキング・オブ・ヒーローに返り咲き、その下をブルーローズ、ファイヤーエンブレム、ドラゴンキッドが平行線で二位から四位を争っている。そこまではまだいい。だが、ここのところ折り紙サイクロンはロックバイソンとは対照的に、目に見えて成長している。ヒーローとしての自覚に目覚めたのだろうか、いつ上位争いに参加してもおかしくない勢いだ。

つまり、ロックバイソンは置いてきぼりを食らっていた。ヒーローとして精一杯平和を守っているつもりだが、誰にも追いつけないのだ。カードも自分のものだけが一番売れ残っている。今度発売されるフィギュアも自分のものだけが売れ残るに違いない。一度不安に駆られるとどこまでも落ちていってしまう。そして遂に崖っぷちに立たされたのが今さっきだ。

――俺はどうすればいい……。

クロノスフーズ社を出て、アントニオはまず深い溜息をついた。直後、まるで背筋を伝ってくる誰か指先のような恐怖に冷や汗が走った。

クビ。

頭の中をその二文字だけが何度も往復する。クビになったらどうなる？　ヒーローとしてもう十年以上シュテルンビルトの平和を守ってきた（はずだ）。自分にはヒーローしかないと心に決めるには十分過ぎる時間だ。体力にはまだ自身がある。引退にはまだ早い。コメンテーターとして再就職出来るか？　だがクビになったヒーローがコメンテーターになれるのか？　コメンテーター以外に何がある？　もう何もない。ヒーロー一筋でやってきた俺に、他の道はない。

「どうすればいいんだ……」

アントニオはウイスキーの入ったグラスを一気に飲み干した。贔屓にしているバーのカウンター席に座って既に一瓶空にしたのだが、何故か酔えない。

バーの奥の壁は巨大な液晶のディスプレイが占めており、ヒーローの活躍を中継する特別番組ＨＥＲＯ　ＴＶを流している。今日ではなく、先週起こった事件を録画したものだ。アントニオはそれをぼんやり眺めながら、自分の姿が何秒映っているかを数えた。

犯行現場にロックバイソンが登場。一、二、三秒、そこで画面が切り替わった。犯人が乗った車にファイヤーエンブレムのカスタムカーが追いついたからだ。ブルジョワ直火焼きの名に恥じぬ超高温の炎が彼（本人は女子だと言い張っているが）の掌から飛び出し、逃走車の後輪タイヤのゴムを焼き尽くした。コントロールを失いスピンする車にブルーローズの乗ったバイクが接近し、両手に構えた拳銃から氷を発射する。危うく車線から飛び出し大事故に発展する寸前で、蛇のように伸びた氷が車を捕らえた。三人グループの犯人達は慌てて車から飛び出し走って逃走を試みるのだが、内二人をドラゴンキッドとスカイハイが捕えた。最後の一人は一般人を脅して

車を奪おうとしたが、折り紙サイクロンの巨大な手裏剣が犯人の動きを封じた。むろん手裏剣の向きは書かれている企業名がちゃんとカメラに映るように計算されている。犯人は無事確保。一般市民に被害なし。ロックバイソンの映った時間は僅か三秒。前回は二秒だったからまだいい方だ。その時はファイヤーエンブレムのカスタムカーのボンネットに乗っていたのだがバランスを崩して転げ落ち、現場に向かっている最中にＨＥＲＯ　ＴＶの中継車と擦れ違った。今日なんて一秒も映ってはいないのだから、随分マシな方だ。

最後に現在のランキングが発表された。スカイハイが断トツの一位。二位以下ドラゴンキッド、ブルーローズ、ファイヤーエンブレムと続いているが、僅差なので順位は頻繁に入れ替わっている。五位は折り紙サイクロンで、あと一歩で上位争いに参加できるほどのポイントである。そして最下位にロックバイソン。見慣れた位置だ。折り紙サイクロンにあと一歩、いや二歩だろうか。獲得ポイントのほとんどは現場に到着した順番で得られるものだ。人助けなど、事故現場に取り残された市民達の誘導で稼いだものが多い。

「いかん、俺は何を……あ、マスター、おかわり」

ポイントを稼ぐためにヒーローをやってるわけじゃない。だが、ポイントを稼げないでいるせいでリストラの危機に立たされている。

「ヒーローって、一体何なんだ……」

思わず、そんなことを呟く。特に何も考えていなかったので、咄嗟に出たその一言には何ら意味はなかった。だが、すぐ横から手を叩く音が聞こえてきたので、アントニオは振り返った。

「まーったくその通りだよ兄さん。ヒーローって一体なんなんだろうね。市民の平和を守るとかなんとか言っても、それでお金貰ってるんでしょ？　何がヒーローだよ全く！」

二つ隣の席に、見知らぬ男が座っていた。丸い椅子から尻が半分出ていて、カウンターに片肘をつけて辛うじてその体勢を保っている。スーツはボタンが全部空いていて、ネクタイはほとんど取れかけている。顔は真っ赤で、相当出来上がっているようだ。

「大体あのロックバイソンって奴が気に食わねえ！　全然活躍してねえのに金だけはいっちょまえに貰ってるんだろ？　ふざけんじゃないよNEXTだか何だかってだけでヒーローやってテキトーに仕事してるだけで金貰いやがってこっちがどんだけ苦労してると思ってるんだ！」

呂律は回っていないが、なんとか聞き取れるレベルの愚痴だ。特にロックバイソンという言葉は耳に残った。

「いや、でもアイツだって俺達みたいに色々悩んだり……」

「いやあれは手を抜いてるだけさ。最近じゃあのテレビ番組にもほとんど出てこねえ。サボってるだけだよアイツは……ったく、俺の息子もなんであんなヒーローのファンなんだか」

「えっ、本当ですか？」

思わずアントニオは立ち上がった。俺のファンだと！？

「ああ、息子は一度ロックバイソンに助けられたんだよ。それっきりロックバイソンロックバイソンって……そもそもヒーローがいるのにどうして銀行強盗なんか起こるんだよ！　犯人達はどうせヒーローの何人かはサボってるって知ってるんだ。だから成功するかもしれないって、それで強盗してんだよ。元を正せば全てヒーローのせいじゃねえか！　ヒーローのせいで犯罪が起こってるんじゃねえのかよ、ああん？　アポロンメディアの社長以外にもぜってーいるよ！　ウロボロスだかなんだかしらねえけど、ヒーローなんてその組織の操り人形でしかねえんだ！」

男は大声でまくし立てた。警備員がやってくるまでずっとヒーローに対する強烈な暴言を吐き続け、店から連れ出される頃にはその場にいた全員の注目を集めていた。店の大型ディスプレイには、相変わらずヒーローに関する情報が流れている。

アントニオの脳裏に、酔っ払いの言葉がくっついて離れない。その重さに負けるように座り込み、頭を抱える。

――俺にもファンがいる。でも、ヒーローを嫌っている奴もいる……特に、俺を嫌ってる奴が……。

だが、前者のことだけで、アントニオは少し背中を押されたような気がした。酔っ払いの考えていることもわからないでもないが、だからといってヒーローという自分から逃げ出したくはない。
ヒーローを続けたい。
たとえ崖っぷちでも、辞めさせられるまではヒーローだ。そこまで気を奮い立たせられるのに、その影にはいつも心配事がつきまとう。本当にクビになったら？　ファンがいなくなったら？　些細なことだと蹴飛ばせない自分が情けなかった。だからといって酒の力に頼っている自分は、もっと見苦しい。
アントニオは考えた。その不安を解消させるにはどうしたらいいだろうかと。
ふと、ワイルドタイガーのことが頭に浮かんだ。一度クビになった虎徹は、どうやってこの危機を乗り越えただろうか？
――虎徹は確か、アポロンメディアに転職して、そして……。
そこまで考えて、突然アントニオは閃いた。
「そうか……その手があったか！」
勢いよく立ち上がったアントニオを、猛烈な吐き気が襲った。

ファイヤーエンブレム

翌々日、アントニオは早速ネイサン・シーモアを飲みに誘った。HERO's BARではなく、別の店に。

三層構造の都市シュテルンビルト、その三層目の古ぼけたビルの地下にそのバーはある。カウンター席しかない狭い間取りだが、昔は虎徹と一緒に此処で飲んだことも少なくない。たまたま今日はアントニオの財布の事情でここを選んだわけだが、ネイサンは快く承諾してくれた。

店内には、二人以外の客はいない。端の席に座り、同じウィスキーを注文する。その間、アントニオはネイサンを見ようとはしなかった。

「じゃあ、乾杯しましょ」

「あ、ああ」

アントニオはこれから持ちかける話のせいか、グラスを持つ手が一瞬震えた。ネイサンはふざけているように見えて妙に勘のいいところがある。必死に悟られまいと言い聞かせれば言い聞かせるほど、緊張が汗や震えとなって外に出てしまう。

グラスを軽くぶつけ合い、互いに一口飲んだところで、ネイサンがじっとアントニオを見つめてきた。彼は浅黒い肌に坊主頭の精悍な顔つきだが、厚化粧と言葉遣いを持って自分は女子だと言い張っている。アイシャドーとマスカラに彩られた眼差しは、それでいて真剣そのものだ。

「で、こんなところに誘うなんて、悩み事でもあるの？」

「いや、それは……」

いきなり図星を突かれ、アントニオは酒を煽って誤魔化した。カウンターの奥で、マスターが何かを察したのか奥の方へと消えていく。マスターのさり気ない気遣いが、アルコールと共に身に沁みる。

「もしかして、添い寝？」

「そんなんじゃねえよ！」
「あら、それは残念」
冗談めかして笑うネイサンの気遣いが、少しだけ嬉しくて、同時に悲しかった。自分がとても情けない。ネイサンは「困った時はお互い様」とでも言うのだろうが、アントニオ自身、何か借りを返せるようなことを一度でもしたことがあっただろうか。
もう一口。それでグラスが空になった。ネイサンが黙って二人の間にあったボトルを手に取り、アントニオのグラスに注ぐ。アントニオはすかさず飲もうと手を伸ばすが、直前で思い留まった。酒にまで頼るわけにもいかない。
アントニオは大きく深呼吸し、片肘をついて彼のことを眺めていたネイサンに向き直った。
「なあ、これから言うことはあくまでも例えばの話なんだが」
「うん」
「だからそんなに気にすることでもないって言うか、俺としてはそんなに悩んで欲しくないっていうか、その……」
「じゃあ悩んでないでその例えばの話を聞かせて頂戴よ」
「おう、わかってる。でも、いざってなるとだな……」
「もー、それアンタの悪い癖よ。自分でもわかってるでしょ？」
ネイサンは半分ほど残っていたグラスの中身を一気に飲み干すと、アントニオに目で「注げ」と合図した。時折見せる彼（彼女）の本性の目つきは、アントニオよりも雄々しい。
完全に気圧されたアントニオはその巨体に似合わず両手で丁寧にボトルを持つと、ネイサンのグラスへゆっくりと近づけた。
「あのさ、例えば……」
アントニオは酒を注ぎながら口を開いた。
「俺とお前が、コンビを組むってことになったら、どうする？」
ネイサンは予想外の質問に眉を顰めた。どんな悩みなのか見当をつけていたのだが、そのどれにも当てはまらなかったからだ。
「……まあ、組むでしょうけど、そもそもそんなことにはならない

でしょ」
「違う違う。そういうことじゃなくって！」
アントニオは注ぎ終えたボトルを置くと、手を大きく振って否定した。既に酒が回り始めているらしい。
「俺が！　ロックバイソンが！　もしヘリオスエナジーに！　転職したら！　どうする！？」
「……は？」
ネイサンは思わず地声で聞き返した。
「なあ、雇ってくれるか？　答えてくれよ社長だろ？」
アントニオの目尻は涙を湛えていた。拳がカウンターテーブルを叩く。悲しげな叫び声は、幸い聞く者はネイサン以外にいなかった。
「急にそんなこと言われても……」
「そんなに考えなくていいんだ。なあ、俺がお前のパートナーになるとしたら、どう思う？」
「ん？」
「だからパートナーだよパートナー！　二人で一緒ってことだ！」
酔いのせいか、アントニオの呂律はあまり回っていない。その視線も上級階層の道路を走る車を追いかけているかのように定まっていない。
そんな彼の容態よりも、ネイサンには気になるものがあった。
「パートナーって、あの？」
ネイサンにとってパートナーと聞いて真っ先に思いつくのは人生の伴侶――婚約の契りを交わす相手であった。
「そう。あのパートナー」
アントニオはやっとわかってくれたかという風に力強く頷いた。
「……あなた、本当に大丈夫？」
ネイサンは自分の頬に熱が集まってくるのを感じた。これは酔いのせいだと言い聞かせる。気持ちの整理が追いつかない。プロポーズ？　何故いきなり？
「大丈夫じゃねえ。全然大丈夫じゃねえよ！　俺は今にも自分に負

けそうになってる。こんな性格を変えたいと思ってるのに、一人じゃどうにもできねえんだよ……」
　いよいよ心配になってきたネイサンはアントニオの背中をさすり始めた。彼の大きな背中がすすり泣く声に合わせて震えている。ネイサンは慈しむようにその背を撫でた。引き締まった筋肉の隆起が、服の上からでも伝わってくる。いつもは触れようとしただけで飛び退くのに。
「ああ、くそ。ダメだ、飲むしかねえ」
「あ、こら」
　とうとうボトルから直接飲もうとするので、ネイサンは思わずそれを制した。アントニオは意外にも素直にそれに応じた。
「今日はもうよしなさい」
「わかった……じゃあ、最後に俺の質問にちゃんと答えてくれ」
　アントニオの手が、縋るようにネイサンの手に重なる。ネイサンは心臓が一際強く鼓動したのを感じ、彼の視線から逃げるように天を仰いだ。ランプを模した照明が、オレンジ色の明かりを振り撒いている。
「……やっぱり、その、いきなり言われても……もうちょっと時間をくれれば、ねえ……」
「そうか。付き合わせちまって、悪かったな」
　ネイサンの言葉を遮って、アントニオは店を飛び出した。あまりにも早口で、素っ気無い幕切れだ。
「待って！　まだ話は……」
　ネイサンも後を追おうとしたが、会計を済ませないわけにもいかず、マスターを呼んだ。大急ぎで店を出たが、既に通りには人の気配はなかった。よほど全力で疾走したらしい。
　ネイサンは次に会ったときのことを思うと気が滅入った。そして、まるで恋人と喧嘩した後みたいだと自嘲した。まだそんな関係ですらないのに。
　しかし、どうも気がかりだった。少しずつ酔いが覚めていくと共

に、彼が本当にプロポーズをしてきたとは思えなくなった。家に着く頃には、それが確信へと変わっていた。

「ウチに転職とか、言ってたわねえ……」

ブルーローズ

「で？　アタシに用って何？」
カリーナの不機嫌そうな目つきがアントニオを射抜く。この気の強さだけは、ヒーローの時と全く変わらない。
「いや、実は折り入って話があるんだ……」
「それはさっき聞いた。だから此処に来たんじゃない」
アントニオの消え入りそうな声を軽く一蹴し、彼女はテーブルの上に置かれたタッチペン式のタブレットを手に取った。
「言わないんなら、歌の練習始めるけど」
「あ、ああ……いやダメだ、話を聞いてくれ！」
二人はカラオケボックスの個室にいた。つい先ほど、アントニオはトレーニングルームを出ていこうとしたカリーナに声をかけ、そのままついてきた次第である。話を聞いてもらう代わりに、料金はアントニオが持つことになった。
「ならとっとと話しなさいってば」
カリーナは曲を転送するタブレットをテーブルに戻して腕を組んだ。ぱっちりとした両目にはまだ幼さが残っているのに、威圧感だけならアントニオを凌駕している。その目力に萎縮してしまうのが、みっともなかった。アントニオは気持ちを切り替えるために深く深呼吸した。しかしカリーナには目を向けず、会員を募集中との宣伝を延々と流しているディスプレイを見ながら、
「あのな、今日お前に声をかけた理由は――」
「失礼します。こちらがお水と、ホットコーヒーになります。ごゆっくりどうぞー」
話しかけようとしたところを、ドリンクを持ってきた店員に邪魔された。店員はアントニオとカリーナを変に勘繰るような視線で一瞥し去っていった。
「……」

「ほら、もう店員さん行ったんだから」
気まずい空気は、またもカリーナが打ち破る。アントニオは仕切りなおすためにコーヒーに口をつけ、もう一度深呼吸した。ディスプレイはいつの間にか映像が切り替わっていて、ブルーローズの新曲が本人映像つきで配信中という宣伝をしていた。青い髪、青いアイシャドー、青い唇……とにかく青を基調としたメイクとコスチューム。そしてあの決め台詞「私の氷はちょっぴり――
そこで再び画面が切り替わり、カラオケ独特のアレンジ（というより手抜き）のきいたイントロが流れ始めた。はっとアントニオが視線をカリーナに戻せば、彼女は既に曲を転送し終え、マイクまで手に持っていた。
「お、おい！」
「うるさい！　アンタが何も言わないからよ！」
カリーナはマイクで怒鳴った。すかさず水を飲んで喉を潤している。
「俺の話を聞けって！」
「さっきから話をしないのはどこのどいつよ！」
アントニオの声も、カラオケの大音量には敵わない。彼は、本当はカリーナがブルーローズの決め台詞を聞くのが恥ずかしかったから曲を入れたのだということには今後も気づくことはない。
全てを誤魔化すように歌い始めたカリーナには、いくら呼びかけても無駄だった。しかし、アントニオもこのままずるずるとカラオケの流れになり、室料をおごっただけで帰るわけにも行かなかった。せめて手短に用件だけでも伝えておかなくてはならない。
だがそこで思い留まった。カリーナに対して「俺とコンビになってくれ」と言うのはいささか突飛過ぎやしないか、と。変に疑われても困る。さっきの店員の勝手な考え（というのはアントニオの勝手な考えだが）が本当になってしまっては交渉などできるはずもない。
――なるべく、オブラートに包むんだ……

そう言い聞かせながら、言葉を慎重に選ぶ。コンビやパートナーなどという言葉は語弊があるので使えない。「お前と」や「一緒に」なんてのも駄目。それらの言葉を用いず、二人で戦うことを暗に伝えなければならない。

そこでアントニオは閃いた。先ほどのブルーローズの映像を見ていたおかげだ。

カリーナの曲は終盤に差し掛かっていた。今更だが、やはり上手い。アイドルとはいえ、彼女の歌唱力は本物だった。歌手になるという夢の裏には、こうした地道な努力が積み重なっていたのだ。

――努力、か……

ヒーローになりたいと思ったのはいつからだったか。あの頃はがむしゃらで、自分でも何をしていたのかよく覚えていない。ただ、ロックバイソンのコスチュームを与えられた時の喜びは、今でもはっきりと胸に残っている。ヒーローになってからも、トレーニングを怠ったことなどない。年は取っても、体力だけは落とさないように最善の注意を払っているつもりだ。

それでも、今の自分はあの頃とは違う。十年以上ヒーロー活動を続けてきて、初めてクビという壁にぶつかった。努力だけでは、どうにもならない壁。

カリーナの曲が終わった。曲が終わり、宣伝に戻るまでの、一瞬の沈黙が訪れる。

アントニオは素早くもう一つのマイクを手に取り、カリーナが座ると同時に立ち上がった。

「俺は――」

そして、叫ぶ。言葉はなるべく少なく、しかし暗に自分の言いたいことを的確に伝えられる一言を……

「俺は今、歌手になりてぇんだ！」

――もしかして、「今」は余計だったか？

「……はあ？」
ディスプレイが宣伝に入るまでの時間をたっぷり使い切ってから、カリーナは素っ頓狂な声を上げた。目の前の大男に突然アイドル宣言をされたのでは、さすがに即座に返せる言葉もない。
「だから、なんていうかその、歌手だよ！　アイドルだよ！　歌うんだよ！」
彼女の異様な動揺を気にも留めず、アントニオはマイク越しに続ける。アイドルになるということ、それは即ち、ブルーローズと同じ道を歩むということだ。ゆくゆくはブルーローズのスポンサーであるタイタンインダストリーから声がかかるに違いないと踏んでの決断だった。
実際のところ、カリーナが歌手デビューの条件としてヒーロー活動をし始めたのだということをアントニオはまだ知らない。
「つ、つまりその、アタシと同じ風に歌ったりしたいってこと？」
「そう！　そうだよその通りだ！」
カリーナはただ要約しただけだったが、アントニオの食いつきは凄まじい。
「……何かあったの？　今日すごく変だけど」
「いや別に？　別になんでもないぞ、はは」
そのままの疑問を口にすると、今度は一転ソファに座り込んで何かを必死に誤魔化そうとしている。何かあったのだと、カリーナは確信した。しかし彼女一人で背負うには大きすぎる問題のようでもある。西海岸の猛牛戦車が歌手デビューしたいなどと言い出すなんて、正気の沙汰とは思えなかった。
「じゃあ、とりあえず歌ってみなさいよ」
カリーナはおもむろに、手元にあったタブレットをアントニオに差し出した。
「え？」

「歌。なんか得意な奴でいいから」
「ああ、でも……」
「アタシが直々に採点してあげる。歌手デビューしたいって言うんなら、それなりに上手いんでしょ？」
「お、おう。まあな」
反射的にそう答えたが、アントニオは人前で歌った経験など数えるほどしかないし、それも随分と昔のことだ。自分の歌唱力など気にしたことすらない。
タブレットを受け取って、曲の検索を始める。最近のものはよくわからないので、十年以上前の古い曲を転送した。
「……誰の歌？」
曲のタイトルがディスプレイに表示され、カリーナは顔を顰めた。どうやら彼女の記憶には存在しないものらしい。
「まあ、結構前に流行ったもんだからな」
「ふーん、そうなんだ」
イントロが始まり、カリーナは口を閉ざした。自然と、アントニオにも緊張が走る。
「……うしっ」
彼は小さく気合を入れて、歌いだしに備える。そして――

「……」
「……ど、どうだった？」
カリーナは答えずに、身支度を始めた。
「え、おい！」
そのまま部屋を出て行こうとする彼女を呼び止めると、恐ろしい目つきで睨み返された。
「絶対無理！　歌手は無理！」
マイクも使っていないのに、カリーナはかなりの声量で怒鳴った。アントニオに、言葉を尽くした批判の嵐を浴びせる。

アントニオの歌は、お世辞でも上手いとは言えないレベルだった。最初から音は外すし、キーが合っていない。頻繁に声が裏返るわ息継ぎは荒々しすぎてマイクが拾うわで散々だ。これは余計なことだが、アントニオがラップを歌っている姿は少しというかかなり痛々しい。

「……」

アントニオが力なく座り込んだのを見て、カリーナもようやく言い過ぎたと気づいた。無視して帰るわけにもいかなくなり、立ったまま彼に問いかけた。

「ねえ、いきなり歌手になりたいだなんて、何かあったの？」

「いや、それは……」

口ごもるアントニオの不審な態度に、並々ならぬ事情が裏にあるのだと彼女は察した。

「まあ、いいわ。他のヒーロー達には内緒にしといたげるから」

「ああ、すまん……」

――俺は、歌手になんてなれない

アントニオは、ブルーローズとパートナーになろうという計画を諦めた。と言うより、諦めざるを得ない自分の才能の無さに打ちひしがれた。

折紙サイクロン（前書き）

折紙と絡ませて思いましたが、ネガティブなのと意志が弱いってのは結構似てますよね。そういう点でもバイソンさんは恵まれなかったのか……。

あと、今回の話ではイワンのテンションの変化に合わせてあえて呼び方や口調を変えていますのでご注意を。スーツを着てなくてもテンションは変わるだろうと。

それにしても、アントニオは本編での会話シーンも少なく、話し方やノリが意外と不明瞭で自信がないです；　精一杯やらせていただきますのでどうかよろしくお願いします！

折紙サイクロン

「なあ、折紙」
腹筋運動を繰り返していたアントニオは、親と子ほどの年齢差（というより身長差）もある同業の少年に小さく呼びかけた。
「なんですか、バイソンさん？」
金髪の少年――イワンは、その小さな声に気づいたのか、大胸筋を鍛えるフライと呼ばれるマシーンに込めていた力を緩めた。凛々しい顔立ちだが、目の下に隈ができている。大方昨日の夜にブログでも更新していたのだろう。
ジャスティスタワー内に設けられたトレーニングルームでは他のヒーロー達も筋トレに励んでいるが、彼らの話声に気づいた者はいない。アントニオは頻りに他のヒーロー達に気づかれないよう目を光らせながら、イワンに耳打ちする。今日は初めから彼に話しかけるつもりで隣のトレーニングマシンを使っていたのだ。
「実はな、最近ニンジャに興味があるんだ」
「え、ニンジャ！？」
飛び上がりそうになるイワンを、慌てて制した。
「声が大きいぞ折紙！　お前はそれでもニンジャか？」
「はっ！　つ、つい……」
ニンジャという言葉に過剰反応したイワンも、やがて声の調子をアントニオに合わせた。
「それにしても、とうとうバイソン殿もニンジャの魅力に気づいたでござるか！」
囁き声からでもイワンが興奮しているのがわかる。アントニオは少しだけ居たたまれない気持ちになった。まさかコンビを組もうという魂胆のために嘘を吐いているなどと、気づかれるわけにはいかない。
「ああ。最近雑誌で特集を読んでな……俺もああいうニンジャとし

ての心得とか戦闘スタイルを生かせたらなあと思って」
今は良心の痛みを気にかけている場合ではない。
「バイソン殿……」
イワンの瞳が彼自身のブロンド以上に輝き始めた。もう後戻りは出来ない。
だが実際のところ、アントニオは本当に折紙サイクロンのような軽快で俊敏な身のこなしに憧れていた。遠距離攻撃や身体能力の向上でないＮＥＸＴ能力を持つ者として、ロックバイソンとは丁度対になる存在だ。これまでは“見切れ職人”の名を欲しいままにしてきただけのヒーローだったが、今は違う。シュテルンビルトの平和を守るという強い志が、しっかりと成績にも反映されている。元より高い身体能力やポテンシャルを見切れることだけに費やしてきた彼には更に、日本――元よりニンジャへの深い造詣という武器がある。コスチュームの意匠だけに留まらないニンジャをベースにしたアクションはヒーロー活動の大きな支えになっているのは間違いない。
アントニオには、そういった武器がない。
パワーだけならヒーローの中でも一番を誇れるまでに己を鍛えてきたが、今まで自分の力が役に立ったことなどそれほど多くはない。特にベテランと呼ばれるようになった頃からは、むしろ裏目に出ているくらいだ。
「バイソン、殿？」
イワンの声に、アントニオは我に返った。ずっと自分の腹筋を見続けていたと知り、少しだけ切なくなる。
「ああ、すまん。ちょっと考え事をな。なんていうか、ちょっとお前に相談したいことがあって」
「？」
アントニオは今から自分が言おうとしていることが相当恥ずかしく思え、再び自らの腹筋に目を向けることで落ち着こうとした。イワンの年相応の純粋な（本人の性格はともかくとして）瞳を直視で

きるような心境ではなかった。
「あの……実は……ニンジャに……俺も……」
「ニンジャになりたい、でござるか？」
イワンはアントニオの消え入りそうな言葉の続きを紡いだ。感動しているのか、彼の瞳は若干潤んでいる。
アントニオは頷いた。今までで一番良心が痛んだ。イワンの感嘆の吐息が聞こえ、余計に苦しい。
「バイソン殿、拙者は嬉しくて涙が……」
折紙サイクロンのスーツを着てもいないのに完全にスイッチが入っている。彼にますます申し訳が立たなくなってきた。
「でも、まさかバイソン殿もニンジャに憧れていたなんて、意外でござるよ」
「え？」
「拙者は、バイソン殿のようなパワーを持っていないでござる……だからこそニンジャのような素早くて、カッコいい存在に憧れたから……」
「……」
「それは決して強いパワーを得ることを諦めたわけではないでござる。自分のやりたいことを、とことん追求していきたかったんでござるよ。その、見切れ、とか」
「自分の、やりたいこと……」
アントニオはそれを聞いて、己を見つめ直した。自分のやりたいこととは一体何だろうか？　自問の答えは、少なくともニンジャになりたい、ではない。
「でも、たまたま拙者にはそういう方が似合っていたっていうのは、ここだけの話でござるよ？」
「あ、ああ」
力の無い返事には、決して悪気はなかった。しかし、その素っ気無さが、イワンのスイッチを切り替えてしまった。
「バイソン殿、もしかして僕の話……」

見る見るうちに、イワンの表情が翳っていく。アントニオが気づいた時には、もう遅かった。
「……え、いや、聞いてるって！　ちゃんと聞いてっから！」
「でもやっぱり、僕の身の上話なんて、面白くないですよね……」
「待て待て、そんなことねえって。だから元気出せよ」
「バイソンさんと違って僕はまだそんなにキャリアもないし、上手に喋れないし、前にヒーローアカデミーで講義したときも僕が担当した生徒だけ全然面白くなさそうだったし……」
打って変わってネガティブになったイワンに、アントニオは過剰な笑顔とポジティブで対抗する。
「大丈夫！　お前の話は面白かったぞ！」
「……本当ですか？」
努力の甲斐あってか、イワンはちらりとアントニオを窺った。
「おうよ。俺も、自分のやりたいことってヤツを、もう一度考えてみようかと思う」
「僕の話、ちゃんと聞いててくれたんですね？」
「だから、さっきからそう言ってたじゃねえか」
と、アントニオはイワンの肩を軽く叩いた。
――やりたいこと、か……。
少なくともニンジャではないなら、折紙サイクロンに頼み込む必要はない。アントニオ自身、そもそもニンジャになれるだなとどは最初から全く思っていない。このまま話が進んでいたら正直危ないところだったと、内心ほっとしていた。
「じゃ、俺はそろそろ行くとするか。あ、ちなみに今の話は聞かなかったことにしてくれ。よく考えたら、俺にニンジャは似合わねえ」
「あ、バイソンさん！」
立ち上がったアントニオを、イワンが呼び止めた。
「ん？」
「もう一つ、もう一つだけ、話をしてもいいですか？」
イワンにしては珍しいと思い、アントニオは再び腰を下ろした。

彼もここ一年ほどで随分と変わった。ロックバイソンを置き去りにして上位争いに食い込んでいることは言うまでもないが、少しずつ他のヒーロー達とも馴染みつつある。
アントニオも、そういう少しの変化が欲しかった。何も根本から変える必要はない。自分の力を信じたい。
「さっき、ヒーローアカデミーに講義をしに行ったことがあるっていいましたよね？」
「ああ。あれだろ？　ルナティックが現れた頃にやったキャンペーン活動の一貫だよな」
それならアントニオも知っていた。自分は道路や公園など、公衆の場のゴミ拾いを行った。老人ホームやアカデミーへの訪問よりは、力仕事の方が性に合っていると思い選んだ仕事である。
イワンは、アカデミー時代親友であったエドワードについて話した。エドワードは、イワンよりも実力があったにも拘らず、ある事件を起こしたせいでヒーローになれなかった生徒らしい。しかし講義に行った日、脱獄したエドワードに遭遇したという。
「それ以外にも色んなことで落ち込んでいた僕を、タイガーさんが励ましてくれたんです」
「あいつが……」
再びエドワードと出会ったとき、ルナティックが現れ大事件に発展したとうのはアントニオもニュースで見た記憶がある。丁度その日から、イワンはヒーローとしての自覚をはっきりと持ったのだと語った。
「それで、エドワードに昔言われたことと同じことを、タイガーさんにも言われたんです」
「何て、言われたんだ？」
その質問を待っていたのか、それとも当時のことを思い返しているのか、イワンは小さく微笑んだ。
「お前にしかできないことがきっとある、って」
「……」

「……今、なんでこんな話を俺にしてるんだろうって思いませんでした？」
「え！？」
見事に頭の中を見透かされ、アントニオはうろたえる。またネガティブにさせてしまうかもしれないと不安が過ぎったが、イワンは首を横に振った。
「いいんです。ただ、バイソンさんの様子がちょっと心配で、何かできることがあればって思っただけなんで」
「ええ！？」
更に見透かされ、ますますアントニオは驚いた。イワンの観察眼は鋭い。姿形だけでなく、動きや口調まで真似ることができるのだから、言われてみれば当たり前のことだ。
「バイソンさんがいきなりニンジャに興味があるだなんて、よく考えたらおかしいじゃないですか。何があったのかはわからないですけど、困った時はお互い様ですよ」
「折紙……お前、言うようになったじゃねえか」
競い合うライバルであると同時に、ヒーローとしては後輩に当たるイワンの成長を垣間見た気がして、アントニオは素直に嬉しくなった。
しかし、喜びは束の間に過ぎなかった。イワンは突然アントニオに一冊の本を差し出してきた。表紙は長い帯のようなものを複雑に巻いて股間を隠した上半身裸のふくよかな男性の写真が飾っている。髪形は、日本独特の髷（まげ）と呼ばれる形に結えてあった。
「なんだ、これ？」
「リキシでござる！　スモウっていう日本のスポーツでござるよ！」
いつの間にかスイッチの入ったイワンは嬉々として答えた。
「バイソン殿にはきっとスモウレスラーになれる素質があるでござる！　張り手でバッタバッタと犯人達を成敗できるのは、きっとバイソン殿のような力強い人しかいないはず！」
「そ、そうか……はは……じゃ、俺今度こそ帰るな、すまん」

アントニオは苦笑いしながら、逃げるようにしてトレーニングルームを出て行った。イワンの話は聞いたし、アントニオから話すことも何もなくなった。

「あ、バイソン殿！　そういう時はごっつあんです！　って言うでござる～！」

他のヒーロー達にどうか怪しまれませんようにと、アントニオは強く祈った。

ドラゴンキッド（前書き）

パオリンの口調には苦労しました……そもそもバイソンとの会話が少なく、結局は多少敬語を織り交ぜることにしました。

ドラゴンキッド

トレーニングルームの一角にあるリングで、二人の男女が戦っている。現在二人以外に人はおらず、互いの叫び声と、拳や足が奏でる空を裂く音が響く。

「うぉおお！？」

ホァン・パオリンの上段蹴りが、アントニオの右頬を掠めた。咄嗟に身体をずらしていなかったら顔面に直撃するところだ。パオリンの柔らかい身体から伸びるように繰り出される攻撃は、速すぎてアントニオの目にはとても追えたものではない。長年培ってきた感覚を頼りに、辛うじてかわすのが精一杯だ。

「はああっ！」

パオリンは戻した右足でそのまま床を蹴ってアントニオに飛び掛る。咄嗟に彼は腕をクロスさせ身構えた。パオリンの左膝が丁度アントニオの交差したガードの中心に命中するが、それだけでは倒れない。彼女は翼でも生えているかのような長い滞空時間のなかで後方宙返りし、両足でのドロップキックを同じ箇所目掛けて見舞った。これは効いたのか、アントニオのガードが崩れる。パオリンは更に一回転して着地し、間髪を入れずに左右の拳をアントニオの胸板へ叩き込む。一発一発が正確に入り、彼女の倍以上もある巨体をリングの後方へと押しやっていく。アントニオは反撃に大きな腕を振り回すが、彼女にとっては目を瞑っていてもかわせるほど粗末なものでしかなかった。

とうとうアントニオの背中がロープに触れ、身体が沈んだかと思えば、勢いよく跳ね返る。

完全に無防備になった彼の鳩尾に、パオリンの両の手による掌底が滑り込むように決まった。

だが、それよりも早く、アントニオは自身の能力を発動させていた。パオリンの攻撃は確かに急所にヒットしたのに、手応えはまる

で鋼にぶつけたことと等しい。
「……」
「バイソンさん、能力は禁止って言ったじゃないですか」
パオリンが頬を膨らませながら不満気に漏らした。確かに能力を使わずに己の肉体だけで戦おうと提案したのはアントニオだ。そして彼は今そのルールを自分で破った。保身のためだ。
「いやあ、今のはちょっとマトモに受けたらマズイかと」
「本気で来いとも言いました」
「……」
確かにその通りだった。トレーニングルームから他のヒーローがいなくなるのを見計らって、アントニオはパオリンに声をかけたのだ。
「約束どおり、ご飯おごってくれるんですよね？」
年相応の笑顔に戻ったパオリンは、今にも口元から涎を垂らしそうな勢いだった。
「おう、どこでも好きなとこでいいぜ！」
パオリンは、勝った方がご飯を奢るという賭けを提示するとアントニオの話に乗った。そして彼女が勝ち、飯を奢るのはアントニオの計画通りだ。
ただ一つ狂いが生じたのは、アントニオはわざと負けるつもりであったが、本気で戦って本気で負けたことぐらいであろう。

黄色の生地に黒いラインの入ったトラックスーツを着た少女は、いささかシュテルンビルトの一層目、富裕層の暮らすゴールドタウンにあるチャイニーズレストランに不釣合いない出で立ちであった。しかも連れが普段着である皮のジャケットを着た大男であるなら尚更だ。年齢差はまだしも、見た目からして親子でないことは一目瞭然である。店員の営業スマイルの奥に秘められた疑惑の眼差しが痛い。

案内されたテーブルを二人で向かい合うようにして座ると、パオリンの方は早速メニューを手にとった。薄い黄緑色のショートヘアに添えられた、紫苑の髪飾りや、嬉々として料理の写真を眺める彼女の表情は、やはり年相応の少女そのものだ。

しかし、パオリンの強さは子供どころか大人の範疇にも収まらない。カンフーは伊達じゃない。これを習得することができれば、あるいは彼女とパートナーを組むことができるかもしれない。アントニオには、そんな算段があった。

ホァン・パオリン――稲妻カンフーマスターことドラゴンキッドは、現在活躍している正規のヒーローの中で一番若い。若干十四歳にして、ランキング上位を争うほどの実力者だ。電撃を操るＮＥＸＴ能力とカンフーは、確かに実践向きで彼女も十二分に使いこなしている。彼女ほどの身のこなしなら、ビルとビルの間を飛び越えることも大した問題ではないのだろう。

ロックバイソン同様、移動にはトランスポーターと呼ばれる大型のトレーラーを使っているが、現場に着くのが速いのは大抵ドラゴンキッドだ。それは何故かと言えば、単に本人が素早いかどうかの話である。ロックバイソンにもカタパルトで発射するという物騒な移動方法もあるにはあるので、そこはイーブンと言ったところか（と、アントニオは勝手に思っている）。

問題は、いざ犯人と対峙した時だ。ＮＥＸＴ能力の差はあるにしても、精錬されたカンフーで戦うのと鍛え上げた肉体を無心に振り回すのでは大きく差が生じるのではないか（と、アントニオは最近思っている）。

力任せに犯人の乗った車を止めて持ち上げたところで、大して意味はない。むしろ、逃げ出した犯人を確実に仕留める方法がポイントを得るという点でも、活躍するという点でも有利だ。

アントニオは、自分のパワーとドラゴンキッドのカンフーが融合したらどうだろう、と考えた。イワンに言われた言葉が蘇る。

――お前にしかできないことがきっとある、か……。

それはニンジャになるということではなく、カンフーを習得することなのではないか。自らの肉体を生かせるのは、ニンジャではなくカンフーなどの武術のはずだ。力だけに頼ってきたが、そこに技が加わればどうだろうか。
「バイソンさん。ボク、この中華フルコースがいいな」
「ん、おう」
彼女の注文を二つ返事で了承したものの、アントニオはそのボリュームと値段にまで目が行ってなかった。
円卓テーブルの中心にある、一回り小さい円形の回転テーブルの上に次々と料理が運ばれてくる。やけに多いなとアントニオが気づいた時には、もう遅かった。会計の時を覚悟せずにはいられず、自分が頼んだ食事もあまり喉を通らない。
パオリンは小柄な体の何処に入る余地があるのか、次々と料理を口の中へ放り込んでいく。頬を一杯にして咀嚼する様子は、まるでリスのようだが、こんなに強いリスは他にいないだろう。
そう、彼女はやはり強い。アントニオよりも圧倒的に強い。それは彼自身も認めざるを得ない。しかし、アントニオがカンフーをマスターすることができれば、あるいは。そして、マスターするためには――
「なあ、ドラゴンキッド」
アントニオは頃合を見計らって、蓮華を置いた。丁度パオリンも小龍包を飲み込んだところだ。
「なんですか？」
「お前のカンフーは、本当にすげぇよ」
「え、そ、そうですか？」
極めて真剣な面持ちで賛辞を送るアントニオに気付いているのかいないのか、パオリンは謙虚になろうと努めたが顔の綻びを隠せない。
「ああ……俺にも、教えてくれないか？　カンフー」
「へ？」

「だから、カンフー」
アントニオが本気の目をしていることが、パオリンにはまだ信じられなかった。彼女のロックバイソンに対する印象といえば、ヒーローの中ではかなりのベテランで、その大きな体を生かした豪快な戦い、そして守り方をするタイプである。それが何故今ここにきてカンフーを習得しようするのか。
そもそもパオリンが武術を極めるきっかけとなったのは、生まれ故郷もその一つだが、何より小柄な体型がヒーローにとっては致命的な弱点になるからだ。武術というのは基本的に弱者が強者に勝つための術であり、彼女はカンフーをマスターすることで自分の弱点を補ったと言ってしまっても過言ではない。
パオリンはアントニオを観察してみるが、年齢を感じさせない筋肉が服の上からでも見て取れる。一体何を思って彼がカンフーにこだわるのか、謎は深まるばかりだった。
「なあ頼むよ。俺をお前の弟子にしてくれ！」
思わず鱶鰭（ふかひれ）のスープを吐きそうになったが、パオリンはなんとか堪えた。来るかもしれないとわかってはいたものの、些か以上にショックが大きい。アントニオが頭を下げているのは、決してチャーハンを犬食いしているわけではない。手合わせに誘われたのがまさかこのためであったとは、パオリンは呆れるどころか憤りさえ感じた。
「どうして急に、そんなことを？」
「お前と手合わせしてみてわかったんだよ。カンフーを身につければ、俺ももっと強く慣れるんじゃないかって」
アントニオは朗らかに答えたが、パオリンには通用しなかった。彼女は、そこに真意がないと察した。先日折紙サイクロンに話しかけていたとき――いや、それよりも前から彼の様子はどことなく変だ。何やら秘密の話をしていたようだが、彼女も含めて他のヒーロー達は見て見ぬふりをしていた。スカイハイだけは本当に気付いていなかったのかもしれないが。

とにかく、ロックバイソンことアントニオは焦っている。何があるのかは知らないが、パオリンは軽々しく口車に乗せようとする目の前の大先輩に失望した。
「バイソンさんは……きっと迷ってるだけです」
「え……」
険悪な口ぶりは、アントニオの関心を向けさせることに成功した。
「何かあったんですよね？　そうでもなきゃ、いきなりボクにこんな話なんてするはずないじゃないですか」
「ドラゴンキッド……お前……」
予想だにしなかったパオリンの苛立ちを前に、アントニオもまた、戸惑うしかなかった。
「ボクは弟子なんか取れません。人に教えるために、カンフーを習ったわけじゃないし。そもそも、バイソンさんはなんでカンフーを習いたいんですか？」
「いや、それはその……」
「やっぱり答えられないんですね。疚しい事情なら、ますます武術なんて教えられません」
きっぱりと言い放ち、パオリンは黙々と食事を再開した。
アントニオは、返す言葉もなかった。この空気で、コンビを組んでくれとか、事業部の人に俺を紹介してくれなどとは言えるはずもない。
「すまん、ドラゴンキッド……確かに俺は、疚しい事情があってお前に声をかけたんだ」
チャーハンに目を落としながら、アントニオは謝罪した。思えば、イワンに話しかけたときもこんな強引な手を使ったが、あれはたまたま彼の機嫌を取ることができただけだ。彼女の逆鱗に触れてしまう可能性があることを、考えもしなかった自分の失態だった。
「ヒーロー失格だな、俺は……」
思わず口をついて出たのは、ほとんど真実だ。こんな姑息な手段で生き残ろうとするなんて、なんと愚かな行為だろうか。事業部の

目は正しかったのかもしれない。自分自身に腹が立ってくる。
――俺は、一体何をやっているんだ……。
ヒーロー一人一人に声をかけて、遠回しにコンビになろうと企むなんて、どうかしていた。一回頭を冷やすべきだと、ポケットの中の財布を探り当てた。金をテーブルの端に置いて、席を立つ。
「本当に悪かった。でも約束どおりこの場は俺の奢りだ。」
「待ってください」
その場を去ろうとするアントニオを、パオリンが呼び止めた。いつのまにか、テーブルの上の料理はアントニオのチャーハンを残して綺麗になくなっている。
「何に悩んでいるのか、ボクにはわからないけど、きっと力になれることが一つや二つくらいあると思うんです」
「……」
「だってボクたち、いつもそうやって助け合ってきたじゃないですか。お互いに競い合ってはいるけど、ヒーローがヒーローを助けたっていいんですよ」
「……ありがとな、ドラゴンキッド。だけどよ、こればっかりはどうしようもねえんだ」
「バイソンさん……」
「じゃあな。お前のおかげで目が覚めたよ」
「バイソンさん」
「なんだよ、まだ何かあるのか？」
「お金、足りてません」
パオリンは、アントニオがテーブルに置いた数枚のお札を指差した。
「え、これでも足りないのか？」
「あと、一桁」
「……」
この後、アントニオはしばらく極貧生活を強いられることになったのであった。

ちなみに会計ではパオリンが全体の６０％を支払った。
貰っている給料の差に、アントニオはますます自分が窮地に追い込まれていることを実感した。

ドラゴンキッド（後書き）

パオリンちゃんのキャラが少々違うような気もしますが、アニメの方では子守のときにタイガーに結構な調子で怒っていたので、それをイメージしました。自分が駄目だと思ったことは許さない。そんな子供らしい一面だと思っていただければ幸いです。

スカイハイ

トレーニングルームで汗を流していても、不安が解消されることはなかった。アントニオは、自分の真上に暗雲がたちこめているような気がしてならない。いつ落雷が彼を打ちのめすのか――それは右手首に装着されたブレスレットが出動要請を示す発光パターンと共にアニエスからの通信を受けたときだ。ここ数日は特に、このブレスレットを目にする度に要請がかかってないことにほっとしている。

しかし、このシュテルンビルトから事件がなくなることはないだろう。ウロボロスという犯罪組織を壊滅させない限り。ブレスレットは、いつ光りだしてもおかしくないのだ。

トレーニングマシンに座ったまま、アントニオは深い溜息を吐いた。先日ドラゴンキッドに言われたことが、まだ頭に残っている。それによって気付かされた、自分の愚かしさも然りだ。

「バイソン！」

と、誰かの呼ぶ声がしても、アントニオは全く反応できなかった。集中ではなく、迫り来る恐怖に怯えていると、自分が暗闇の中に一人取り残されたような気分になる。周囲にいた他のヒーロー達がこぞって視線を向けているのに、彼は今やブレスレットが死刑宣告を報せる拘束具か何かに思えて仕方がなかった。

「バイソン！　こちらを向きたまえ！」

肩に手を置かれ、ようやくアントニオは顔を上げた。スカイハイことキース・グッドマンが、持ち前の爽やかさを振り撒きながら微笑んでいる。滴る汗ですら輝きに転換しながら、親指だけをグッと上げているのだが、何がグッドなのかアントニオにはわからない。

「どうした、スカイハイ」

「わかるぞ。私には君の考えがわかる。とてもわかる！」

アントニオは素っ気無く言ったつもりだったのだが、暑苦しく返

されてしまった。
　そういえば、キースにだけは何も頼んでいない。だがアントニオはもうそういった姑息な手は使いたくなかったし、そもそも天然相手にどう交渉すれば上手くいくというのだろうか。失礼ではあるが、元より望みのなかった人物だ。空を飛ぶスカイハイとは、コンビを組むことすらままならない。
「わかるから、何だって言うんだ」
「ついてきたまえ、バイソン」
「は？」
「いいから。今日のトレーニングは終わりだ」
　キースはアントニオの肩に置いた手を手首に回し、無理矢理引っ張った。何事かと他のヒーロー達の視線が突き刺さる。キースは意にも介さず、トレーニングウェアを着たまま部屋を後にした。勿論、アントニオを連れて。

　タワーから出ると、キースはアントニオから手を離した。アントニオは逃げ出そうとも考えたが、キースを撒けるか自信がなかったので諦めた。
「おいで、ジョン」
　キースがそう呼びかけると、近くの街灯の下でしゃがんでいた犬が彼の元までやってきた。金色の毛並みを持ってるからゴールデンレトリバーかと、アントニオは知識もないので適当に思案する。ちなみに間違いなくゴールデンレトリバーではない。
「ほら、こっちだ」
　犬に呼びかけているのか、それともアントニオに対してなのかわからないが、キースはリードを持って歩き出した。水色のトレーニングウェアを着たままではさすがに目立っている。アントニオ自身オレンジ色のを着ているが、正直肌寒いが、キースはまるで平気そうである。
　大人しくキースについていくと、やがて巨大な噴水のある広場に

辿り着いた。途中、店に寄ってパンや果物を買ったため、キースは紙袋とリードで完全に手が塞がってしまっている。
噴水を背にしたベンチにキースが腰掛けたので、アントニオもその隣に座った。
「いい景色だろう？」
時刻は丁度太陽が沈みかけの頃で、遠くのビル群の隙間から差し込むオレンジ色の夕日が眩しい。
「ああ」
都会の中でこうした自然そのものの美しさに出会えたことで、アントニオも少なからず感動していた。自分がとてもちっぽけな存在であることを思い知らされるようで、それが逆に心地いい。自分自身が小さければ、抱えてる悩みもまた、同じように小さいはずだと、騙りかけられているかのようだ。
「ちょっと、私の話をしてもいいかな」
しばらくその景色に見とれていると、キースはそう言って紙袋の中から林檎を一つ取り出した。無言でそれをアントニオに差し出してきたので、思わず受け取ってしまう。
「少し前のことだが、私はここで、ある女性に出会ったんだ」
それを了承と受け取ったのか、キースは話し始めた。彼の表情は、持ち前の明るさがほんの少しだけなりを潜めている。
キースは、その女性の名前も知らないという。いつもこのベンチに座っていたのだが、ある日を境にぱったりといなくなってしまったそうだ。
「お礼を伝える前に、彼女はいなくなってしまった。今思うと、彼女は私の生み出した幻だったのかもしれない」
彼女がいなくなった丁度その日、キースは自分自身を取り戻したのだという。そういえば、一時期沈んでいて調子が出ていなかったことがあったのをアントニオは思い出した。まだあの頃は折紙サイクロンと最下位争いを繰り広げていたのに、今は完全に追い抜かされてしまっている。

「でも私は、彼女に大切なことを気づかされたんだ」
「大切なこと？」
「そうとも。バイソン、君は今、己の無力さを痛感しているね？」
「なっ……」
突如キースに図星を突かれ、アントニオは動揺を隠せなかった。あのキースにここまで勘付かれているとなると、もはや他のヒーロー達は完全に察しがついているに違いない。
「私も、そういう時があった。ジェイクに、負けたときからね」
その敗北で思い知らされた無力さは、アントニオも痛いほどよくわかった。それに加えて、スカイハイよりも圧倒的に早く片付けられた自分が、そうやって他のヒーローとも比べてしまう自分が、ひどく情けなかった。わかっていても、劣等感を抱かずにはいられなかった。
「バイソン、言い訳だけじゃ、人は何も変わらない」
「言い訳……」
いつになく目つきの鋭いキースが、彼の素顔のような気がして、アントニオは胸が詰まった。彼は実力と明るさだけでヒーローを名乗っていたわけではない。疑っていたわけではなかったが、キース――スカイハイは確かにヒーローとしての心構えも持ち合わせていた。
アントニオは自問する。ヒーローを続けていきたいとは思っていても、そこに本心があるのか、と。当然ある。しかし同時に、その本心とはかけ離れた方法でヒーローを続けて行こうとした自分がいる。失職する恐れがあることを言い訳にして。
「私達は、行動しなきゃいけないんだ。皆の期待に答えるために。平和を守ることで、市民に我々のメッセージを受け取ってもらえるんだよ」
「……そうだな、その通りだ」
アントニオは、ブレスレットのアラームに怯えていた自分を殴り飛ばしてやりたかった。代わりに、キースの言葉に強く頷く。

ヒーローは、市民の平和を守るために活動する。逆に言えば、それしかない。そのことから逃げていては、ヒーローを続けていけるわけがない。立ち込めていた暗雲から、光が差してきた。夕焼けもそろそろ暗くなるだろうという時、とうとうアントニオは糸口を掴んだ。

「ありがとな、スカイハイ。俺は自分自身を見失うところだったぜ」

「参考になったようだね。君の恋、応援しているよ」

「ああ――って、今何て言った？」

キースが親指だけを上げて応援してくれたので、思わず聞き流してしまいそうであったが、彼は今明らかに見当違いなことを言った。

「だから、君の恋を応援していると……なるほど、他のヒーローからのアドバイスも知りたいんだね！　ファイヤーが言っていたのは笑顔だ！　まずは笑顔！　そしてドラゴンキッドからは相手のことを褒めると良いらしいぞ！」

「違うって！　別に俺は好きな人がいるとかそういうので悩んでねーよ！」

「ははっ、恥ずかしがるな。そんなんじゃスキンシップもままならないぞ？　おっと、ちなみにこれはブルーローズからのアドバイスだ」

「だーかーら！　もー違うってさっきから言ってんだろー！」

夜まで話し合った結果、アントニオは遂にキースの誤解を解くことはできなかった。

しかし、彼の恋のアドバイス（？）は、確かに助けになった。後は、他のヒーロー達にあらぬ噂が広まらぬよう祈ることしかできない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4409z/

【タイバニ】隣の芝生は青い/The grass is always greener on the other side.【

2012年1月9日01時50分発行